

みうらひろこ詩集

ふらふらの涙

九年目のふくしま浜通り



みうらひろこ詩集

『ふらこの涙』

あべ 和かこ



この詩集を手にとると、まず、表装の写真の淡い橙色に暫く見入ってしまう。海に映る太陽は浜通りの朝陽。再生を繰り返す朝陽。生まれたての光は儂げでありながら、決して消えゆくことはない。

そして、その陽に照らされながら在り続けるのは、過去と未来そして、現在を往き来る作者の記憶を具現化させるアイテムとしてのふらこ（ふらんこ）。それは読み手の心をも切なく揺らす。人恋するふらここの涙は月の光の滴。

「九年目のふくしま浜通り」の副題がついた、みうらひろこ氏の第十一詩集「ふらこの涙」は全四章、三十四篇の詩から成る。

全ての頁を繰り終えると、そこには、ヴィクトール・E・ルランクルの「夜と霧」が伝えるメッセージと同じ世界観が感じられる。

作者は、大震災・原発事故

によって、それまで生活してきた地から着の身着のままの避難を余儀なくされた上に、原発の方角から吹いてきた南東からの風に晒されるといふ、あまりにも無情な、慮って余りある体験をされる。

また、愛娘を不慮の事故で失った悲痛な経験も踏まえながら、詩集は調べを奏でてゆく。

特筆すべきは、その詩の世界はしっかりとした生活に根ざしているということだろう。

どんなに過酷な状況に置かれても、生きることを投げ出すことが決してない。詩の中には希望を探し出す、しなやかな視点が見える。

「翡翠よ／私の乾ききった折れそうな心に／素敵なブローチを飾ってくれたんだね」 （詩「翡翠」）

そして、自分を必要としている「何か」「誰か」がいる、という視点もある。

「わたしに会いに来てくれる人々の／平和への祈りの心が波動のように私を包み」

「そんな祈りを託されてきたからではないのか」

（詩「千年桜」）

どんなに過酷な経験をしても、投げ出しさえしなければ、必ず水平線から太陽が昇る。

この詩集は、浜通りの朝陽さながら、そう囁いてくれる。